

第6回 全国修学旅行研究大会

講演及び研究発表要旨

12月1日・大阪



昨年十二月一日、大阪市内において開催された「第六回全国修学旅行研究大会」については前号に掲載したが、今回はその講演及び研究発表の要旨を掲載する。

個性を生かす教育と修学旅行

文部省初等中等教育局 教科調査官 高橋 哲夫



第六回全国修学旅行研究大会 講演要旨
一、現在の教育課題と「個性を生かす」
昭和五十八年十一月の中等教育審議会中間まとめ以降、各審議会の答申において、「個性重視」が指摘されている。新指

導要領においても、総則の第一にこれを挙げていた。その背景に、自己判断の持たない生徒の増大に伴う問題行動の多発がある。現在、学校教育の重点課題ともいえる学校不適応生徒の問題にこそ最大の原因には、社会性の欠如が挙げられる。
また、人間としての生き方についての自覚を深めて自己を生かすことが、個性を生かすことにつながる。人間としての在り方を踏まえて人間として

特別活動は、教科外の各分野における生徒の主体的活動を中心として、教師の立場は、役割やルールを与えることにより、自我関与の喜びを味わわせることができる。
教師の生徒への思いを伝える、共感的な人間関係を醸成することによって、生徒のやる気を起こさせる。生徒の自己存在感を育て、生きがいを感じさせる。自ら処理し決めていく自己決定の機会を与えることにより活動意欲を高める。などを十分配慮することによって、個性の伸長に重大な役割を果たしうる教育活動といえる。

集団作りの中の修学旅行

大阪府富田林市立富田林第三中学校 教諭 林 一幸



自主性の創造をめざして
本校は、昭和四十六年の開校である。開校当初は純農村の小規模校であったが、急激な宅地開発の結果、新旧混合型の住宅地帯へと変容した。校区の拡大、生徒数の急増に伴い、昭和四十九年ごろから生徒の生活上の荒廃が顕著になった。当時の修学旅行は、トラブル防止対策に追い回されるような状態であった。
昭和五十七年度末、校長・教頭を含む三分の一の教員異動が実施されるに及んで教職員の学校に対する危機感最高潮に達し、これを契機として学校再生の取り組みが昼夜を分かたず行われることになった。
学校の運営機構のすべてを

見直し、「自立する生徒集団の育成」を基本的な指導方針として、健全な生徒の力を生かした集団作りの実践を開始した。集団の基礎としての学級に「学級集団作りの基礎的十項目」を設定し、自治力の伸長に力を注いだ。
このような取り組みの中で、宿泊を伴う学校行事は重大な位置を占めており、「宿泊行事検討委員会」を設置して三年間の積み上げを重視した。きめ細かな計画が練り上げられ、評価されていた。
第一学年では、兵庫県鉢伏での合宿を「泊三日」で実施。目標は仲間作り。二小学校から集まった集団をいかにして一つの中学生集団にし、集団としての規律を学ばせるかといった、教師主導型の集団訓練要素の強い宿泊行事であった。
第二学年は、兵庫県淡路における一泊二日の集団合宿で

育課題であり、その意味で、特別活動の果たす役割は重大である。新指導要領、第四章特別活動の第一目標に示されている事項は、そのまま個性を生かすことに置き換えることができる。
二、個性とは
教育目標分類学によれば、個性には、知的領域、身体的領域、感情・情緒的領域がある。この三つのバランスをパーソナリティに深くかかわるものである。
また、人間としての生き方についての自覚を深めて自己を生かすことが、個性を生かすことにつながる。人間としての在り方を踏まえて人間として

成に力を注ぎ、それを核として生徒の自主性、自律性の育成に努めた。学力の充実、学習活動の活性化、基本的生活習慣の態度化を二本の柱として、指導の重点について教師間のコンセンサス作りを意を用いてきた。
修学旅行は、あくまで授業の延長線上にある学習の場であり、その主導権は教師の側にあった。したがって、生徒の運営に任せられるものとならないものとの区別を明確にするという立場から、計画は教師主導で立案したが、実施に当たっては、決められたコースの中で、生徒の主体性を尊重し、心に余裕のある、教師と生徒との信頼関係の確立を目指す創造的な企画を打ち出していた。
本年度の修学旅行は、広島、宮島、萩、秋吉台方面、二泊三日（五月三十一日～六月二日）で実施した。
四月になって、修学旅行実行委員会を、教師二名、各学級正副委員長、生徒会正副会長によって組織して決定させた。また、各班編成に当たって、班内に、班長、生活係、美化・給食係、保健係、レク係、学習係を作り、それぞれ

生徒たちの創意工夫を生かした修学旅行

兵庫県西宮市立深津中学校 教諭 荻野 南子

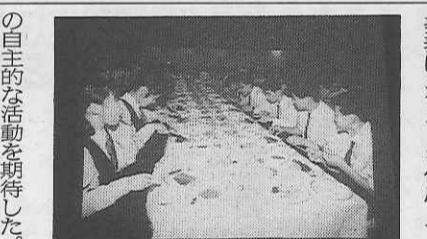


リーダーの育成と班別自由行動
本校は、昭和五十八年に多くの近代設備を備えて開校され、「自分を生かす」ことを校是としている。問題行動は少ない反面、欠損家庭が学級の三分の一にも達し、学習面に

対する地域や保護者の意識は高い。
指示待ちの生徒が多く、リーダーに欠けるという生徒の実態から、修学旅行をいかにして生徒たちに運営させ、達成感を持たせて成功させるかというところが大きな課題であった。
このように課題を解決するために、一・二年の段階から三年間を見通したリーダー養

成に力を注ぎ、それを核として生徒の自主性、自律性の育成に努めた。学力の充実、学習活動の活性化、基本的生活習慣の態度化を二本の柱として、指導の重点について教師間のコンセンサス作りを意を用いてきた。
修学旅行は、あくまで授業の延長線上にある学習の場であり、その主導権は教師の側にあった。したがって、生徒の運営に任せられるものとならないものとの区別を明確にするという立場から、計画は教師主導で立案したが、実施に当たっては、決められたコースの中で、生徒の主体性を尊重し、心に余裕のある、教師と生徒との信頼関係の確立を目指す創造的な企画を打ち出していた。
本年度の修学旅行は、広島、宮島、萩、秋吉台方面、二泊三日（五月三十一日～六月二日）で実施した。
四月になって、修学旅行実行委員会を、教師二名、各学級正副委員長、生徒会正副会長によって組織して決定させた。また、各班編成に当たって、班内に、班長、生活係、美化・給食係、保健係、レク係、学習係を作り、それぞれ

の自主的な活動を期待した。実行委員や班長が事前・事後をとおして活発に活動したことが、集団行動におけるリーダーの重要性と、それを支えたのは自分たちだという連帯感が強まったことが確認された。
修学旅行実行委員会を中心として工夫した取り組みとして、班別自由行動がまず挙げられる。班構成は、既に構成されている学級学習班であり、人間関係は日常的にでき



あがっていた。
自由行動の場所は、広島城・平和公園慰霊塔、宮島、萩城山・宿舎の三か所、指定ポイント計六か所。自由行動の約束事などが協議決定され、その中で、各班が自主的に行動した。各ポイントでは、句作やスタンプ押し、碑文の読み取りなどが課題とされ、各班が真剣に取り組んだ。
このほか、学級づくり、宿舎でのディナー・マナー会や同宿校との交流会、世界へ向けての平和の誓いメッセージ（発送）（三十二か国）などが企画され、実施に移された。これら修学旅行へ向けての取り組みは、前述したように教師の熱心な指導性と、生徒のリーダーを中心とした主体的な活動とが相呼応し、おのずから創造性の豊かな内容を作りあげ、大きな成果を収めることができたと考えている。

創立5周年記念

修学旅行に関する研究論文募集

応募の対象と資格

小学校・中学校・高等学校・特殊教育諸学校の教職にある方々（個人・グループ・学校を問いません）

特別助成および助成

特選	50万円	1編
入選	30万円	3編
佳作	20万円	10編

趣意に合致する論文に対し2万円を助成します。特別助成は個人応募の場合、所属学校へ助成します。

ごあいさつ

修学旅行は子供たちにとって、学校生活の中で最も夢の多い催しの一つであり、生涯の忘れがたい思い出となるものでありましよう。また保護者にとっては、我が子を世に送り出す事始めでもあらうかと存じます。一方、これを指導する先生方にとっては、計画から帰着まで、その心労は並大抵のことではないと拝察します。そして事前の周到な準備と、旅行先における適切な指導が求められるのは申すまでもありません。修学旅行に携わる先生方のご苦心とご指導の成果を明日の資といたしたく、この事業を企画いたしました。

理事長 佐藤 義和

内容および形式

修学旅行のより効果的な企画、安全対策、実践結果の点検反省、将来への展望等
400字詰原稿用紙30枚程度（資料は別）

入選発表および出版

平成2年10月中旬 応募者および関係学校へ直接連絡します。入選作品は出版の上応募者全員に贈呈します。

応募締切日

平成2年6月末日

後援：文部省
(財)全国修学旅行研究協会

お問い合わせ先

財団法人 日動火災教育振興基金

事務局 〒104 東京都中央区銀座5-13-7
☎03-543-6111